欧陽修の詞について

塚本 嘉壽 *
松原 公護 **
林 潔 ***

欧陽修の詞について異常心理学の視点から考察した。彼の詞はほとんどが春と秋を背景にしていることから、春の詞と秋の詞とに分けてその特徴をとり出そうと試みた。まず季節とは何かを理解するために黄道分割の諸可能性を検討した。一年周期の分け方には三分割と四分割の二種があり、それぞれの分け方によって季節の意味が異ることを指摘した。次に春の詞をとりあげた。そこでは閨怨、嘆老、傷春が三大テーマであるが、いずれも傷心が共通している。その傷心には「春であるが故に（wegen）」と「春であるにもかかわらず（trotz）」という二種の契機があり、それぞれが三分割性の季節観と四分割性のそれとに対応することを指摘した。秋の詞ではこの両契機は存在するものの、春の詞におけるほど顕著ではなかった。かわって数篇の秋の詩賦を例示し、そこにはこの契機が認められることを指摘した。
キーワード：欧陽修の詞、黄道分割と季節、「であるが故に（wegen）」と「であるにもかかわらず（trotz）」

一．欧陽修について

欧陽修、字は永叔、は真宋の景徳四年（一〇〇七年）、綿州（四川省綿陽県）に生まれた。一説では吉州（江西省吉安県）に生まれたともいう。父欧陽観は綿州の軍事推官であったが、修が四歳の時に卒した。そのために家は貧しく、母の鄭氏は荻の茎で地に書いて文字を教えたという。（以下、本小論に関連する部分のみを摘記する）。天聖八年（一〇三〇年）、二四歳、優れた成績で進士となり、翌年胥氏と結婚、西京留守として洛陽に勤務した。このころ尹洙、蘇舜欽、梅堯臣らと親しくなり、常に古文詩歌を唱和し文名を知られるに至った。二七歳、妻胥氏が生まれて間もない子供を残して亡くなり、彼は深く悲しんだ。翌年楊氏と再婚したが、この妻も一年後に世を去った。三一歳、三たび薛氏を娶り、またこの年、「五代史」の撰に加わっている。三九歳、政争にまきこまれ、後述する姪張氏をめぐるスキャンダルを弾劾されて滁州の知に貶せられる。四二歳、少しく罪を減じられて揚州の知になり、四三歳、潁州の知となった。四八歳、翰林学士となり「唐書」（新唐書）の修撰を命ぜられた。「唐書」二百五十巻は五四歳の時に完成したが、彼が担当したのは紀、志、表であり、列伝は宋祁の担当であった。通常は分担者のうち

* つかもと・よしひさ、埼玉大学名誉教授　異常心理学
** まつばら・きみもり、とのがやとメンタルクリニック院長　精神医学
*** はやし・きよし、白梅学園短期大学名誉教授　臨床心理学

高位の撰者の名のみが冠せられるのであるが、修は断固として列伝は宋祁が担当したことを明記すべきであると主張したという。五一歳、知貢挙（科挙の出題採点の責任者）となり、平明で論理的な文章を合格させ、華美で難解な文章を落第させた。これは突然の採点基準の変更でもあり、古文復興を大きく前進させることになったが、半面で不条理な行為であり、不合格者の大きな恨みをかうことになった。この時の合格者には蘇軾、蘇轍、曾鞏などがいた。六四歳、青苗法に反対するも容れられず、またこの年、号を醉翁から六一居士に改め「六一居士伝」を著わした。六一とは集古一千巻、蔵書一万巻、琴一張、棋一局、酒一壺、その間に一翁が老を養うという意味であるという。ひそかに引退を決意したのであろうか。六五歳、観文殿学士太子少師を以て到仕して潁州に帰り、翌熙寧五年（一〇七二年）閏七月二三日病逝した。

当時の宋は唐代に比して経済活動が飛躍的に発展し、商工業が大いにふるい、市民階層が興隆した。他方で文治国家の宋軍は弱く、契丹（遼）や西夏（党項、タングート）、後には金（女真、ツングース系）などの侵攻に苦しみ、多くの歳幣を与えて辛うじて国を保っていたが、平和は常に不安定であった。

国内ではこの多額の歳幣附与に加えて多数の官僚への給与などによって国家財政が窮迫し、それを再建するためにさまざまな改革案が提出された。中で最もラディカルな案が王安石の「新法」であり、その中心は青苗法であった。当時は豪族や地主が自作農に高利で種子や金銭を貸しつけており、それを返済できない農民が小作農に転落し、農民層が減少する状況にあった。かわって国家が低利でそれらを貸しつけ、農民層を復興させようと企図したものが青苗法である。他に免役法、市易法などいずれも支配層に打撃を与える法であり、しかしまた急激な変化によって逆効果になる危険性も考えられ、以後、宋朝は新法派と旧法派の激しい争いが続くことになった。王安石は欧陽修の推挙によって世に出たが、欧陽修は新法に反対であり、後に両者は対立することになったのであった。

欧陽修は北宋の古文復興運動の代表者であり、尹洙らの影響を受けて、宋初の太学体と称する徒らに装飾的で険怪奇渋な文体を、簡潔平易論理的な文体へと改革した。詩においても西崑体風の浮艶を捨て、平易で気格を主とする詩風を拓き、以後の詩人たちに大きな影響を与えた。政治家としても重きをなしたが、彼のこの側面については省略することにしたい。

二　彼の詞についての若干の研究概観

田中[2]によれば欧陽修の詞には伝統文学の流れに沿った、風格を失わぬ「雅詞」と、俗語の混入も拒まず伝統の殻をうち破る俗豔の一体、「俗詞」とがある。「醉蓬萊（見羞容歛翠）」、「踏莎行（碧蘚回廊）」、「望江南（江南柳　葉小未成陰）」などは後者の例である。これらはかなり官能的な詞であって一代の儒宗欧陽修にはふさわしくないと考えられ、しばしば彼に敵意を含む人々の偽作という説が提出されてきた。既述の如く、欧陽修は科挙を主宰した時、太学体と称される装飾的で晦渋な文章の作成者を落第させたが、この落第者らが欧陽修をおとしめるために俗豔の詞を彼の詞集に混入させたというのである。「望江南」に関してはさらに「錢氏私誌」「黙記」に、欧陽修が姪張氏の嫁入仕度の資金を盗用したとか、嫁ぐ前に彼女を凌辱したなどのスキャンダルが記されているという。こ

の件について田中は詳しく考察しているが、ここでは省略する。

欧陽修の俗詞をめぐっては諸説が提出されてきたが、田中は多くの旁証から俗詞――具体的には「近體樂府」には収められていないが「琴趣外篇」にみえる七三篇のそれ――の大半を欧陽修の作と考えてもよいのではないかと結論している。士人の詞が雅詞であるべしという考えは、「詞」の文学的地歩が士人の間において確認された時期、また詞の制作が普遍化して士人の手になる醜悪な俗詞の氾濫を現出するに至った時期、つまり詞の愛好者徽宗皇帝を頂点としたそれ以後の時代、いい換えれば儒学が不動の権威を樹立した南宋に多いと彼は指摘する。欧陽修の時代、詞というジャンルは専ら酒席の興を添えるための歌曲であり、衣冠を正して作ることを要求されるものではなかった。俗豔の詞とされる作品全てが彼の作と断定はできないにしても、その多くが彼の手になったとみておかしいことはない。むしろその方が学者政治家として多くの業績を残した巨人欧陽文忠公の人間的振幅をさらに大ならしめるであろう、と田中は結論している。

田中の所説は十分に説得的であり、その俗豔の詞の意義についてもわれわれは全面的に賛意を表したい。ただしこの問題と、彼の詞集への馮延巳、晏殊その他の詞人の作品の混入問題とは、われわれが論じるにはあまりに大きなそれであり、この小論では触れないことにしたい。さらに本論ではもっぱら「雅詞」を中心に論じることにする。その理由は「琴趣外篇」の俗詞のテーマが単調で彼の詞の特徴をとり出すためには不適切であること、またしばしば読解が難かしいこと、による。田中の指摘するように、本来であればこうした側面をも含めた彼の詞の全体像を提示解釈すべきであるが、それはわれわれの能力をこえるので、この小論では限定的な考察に止めたい。

次に瞥見したいくつかの研究について述べたい。

薛砺若[11]は欧陽修が馮延巳や晏殊の流れをくみながら自らの作風を完成させたこと、散文や詩を読むと厳格で古板頑強な人間に思えるが、詞は軽柔嫵媚であり、こうした繊細な側面もあることを知ればかえって詩文の本当の価値を知ることができるであろう、と、田中に似た指摘をしている。またその詞集にはしばしば陽春集（馮延巳）や珠玉詞（晏殊）その他の詞集が混入していること、官能的な多くの詞については後人が悪意をもって竄入させたとする説があること、などもつけ加えている。

黄[9]は北宋が経済的に発展し、大都市の官僚から商賈に至る人々の「娯賓消遣」のために詞曲が作られたこと、欧陽修の詞にもそうした側面があるが、新らしい別の面もあることを指摘している。第一に民間の風土に根ざした新らしい詞を作ったこと、第二に自然の景物の美しさを詠ったこと、第三に艶麗で官能的な詞の中に真摯な感情性をこめたこと、第四に惜春嘆老の詞の背後に国を愛し悲憤慨嘆する気持をこめていること、など。さらに彼は平易な口語をとり入れて新機軸をうち出したこと、慢詞はもっぱら柳永に始まるとされてきたが、彼もその創作に貢献していることをも指摘している。艶詞と他の詞人の作品の混入については簡単に触れているだけである。

陳新[7]は欧陽修の詞が多くの議論をまきおこし、毀誉もさまざまであると述べる。まずそれは清麗明快で蘇軾から辛棄疾にまで至るその後の詞の発展の先駆となったこと、艶詞に関連して姪張氏とのスキャンダルがあるとされ、しかしそれが必ずしも信頼できる情報ではないこと、艶詞の背後に政治的批判がこめられているという説もあること、などを指摘している。

王釣明[12]の評もこれらとほぼ同様である。彼も先述の黄と同じく劉熙

載の、晏殊、欧陽修は馮延巳の影響をともに受けたが、晏殊はその俊を得、欧陽修はその深を得た、という指摘を引き、前者が温庭筠に近い華美な詞を作ったのに対し、後者は韋荘に近い清麗な詞を作ったこと、その詞にしばしば身世の感がこめられていることを指摘している。さらに他の評者と同じく、内容を写景、民間習俗などに拡大したことについても触れている。また欧陽修の詞の大きな部分を占める「抒情詞」について、郭正忠はそれを傷春、嘆老、惜別の三種に分けているが、この三者は常に混在していて分かつことはできないと言い、「玉樓春（尊前擬把歸期説）」その他多くの詞を引いている。

三．黄道分割

欧陽修の詞には春秋を題材とした作品が多く、夏、冬のそれは極めて少ない。詩にはそのような偏位はない。やはり春秋は風趣に富み、抒情性のまさった詞では題材としてとりあげられやすいのであろうか。しかしまず彼の詞の背景をなす季節とは何であるかを一考したい。

黄道三百六十度はいかようにも分割しうる。二分割、三分割、四分割、五分割、六分割・・・[3]。

二分割。暑熱と寒冷、乾季と雨季、二分割は最も基底的な分割ではあるが、あまりにも単純、過包括的であり、一年周期（リトムナニュエル）を彩り、調律し、連続性のうちに変化をもたらす、という効果は期待できない。

三分割。〈三〉とはどのような数であろうか。それは基本的に「二元論によってもたらされた葛藤の解決」を象徴し、対立する二者をより高次な一者へと統合しようとする強い階層上昇的志向性を内包している。それは空間に投影されると三角形となり、基底の両端が頂点へと収斂する構造によって、垂直的秩序の優越、上方への飛翔、高次の統合を、それ故にまた、ピラミッド、火、山、神性、無限等を表わすものとなる。しかしそこに時間性が導入されると、〈三〉は三角形の内的構造よりはその辺縁へとその関心を移動させる。それは底辺の一端から出発し、辺上を頂点へと向かい、再び他端へと下降する。過程に注目すれば三角形はほぼ半円と同義であり、そこには常に初動と終結とその中間経過という三契機が存在することになろう。太陽の三様態、日の出、南中、日没。人間の三様相、誕生、成熟、死。植物の三様相、発芽、結実、揺落。行動の三段階、起動、遂行、終結。論理の三段階、発語、展開、帰結。王朝の三様態、創建、盛期、衰退・・・。このように〈三〉はその本性上、上昇と下降のドラマを内包した強い一方向的、不可逆的運動性をもっている。それ故に一年の三分割はそれぞれの期間、つまり各季節の特性を保ちつつもその基底に常に推移への志向を潜在させ、かつは終結を先駆的に含むある切迫性をもつような季節観をもたらすものであった。古代ギリシャにおいては一年は春、夏、冬であり、秋は単に夏の晩季（オポーラー）であったとさせる。われわれはそこに滞留よりは流動を、生誕の春から輝かしい生命を謳歌する夏を経て死と沈黙の冬へと崩落してゆく推移相の強調を看取することができるのではないであろうか。

〈四〉。〈二〉の二乗。一本の線による第一の分割は精神が世界に最初に刻みこむ切れ目、原初的な認識の端緒である。そして、それに直交する線による第二の分割は全く異質な原理に基づく世界の認識、以下に続くさらなる無限分割を予兆させつつとりあえずは第一の分割と協同してはじめて複数の視点から世界を把握し、定位するような認識である。この分割は対称的かつ対比的である。分割の対称性は世界の秩序性、均衡

性、規則性、安定性、堅固性などの性質を顕在化させる。他方で分割された各域に包含された万象は対比性によって特有な色調を帯びることになろう。〈四〉の対称対比性は世界の多様性を内包しつつも、均等な、極めて安定し、推移をむしろ抑圧した静止的構造をもたらす。一年の四分割は、それぞれの季節の特殊性を際立たせ、分割線をより強調するような季節観を形成させる。しかし逆説的にもそれはこの対称性それ自体によって原点を通る軸を中心に回転し、春から夏秋を経て沈黙の冬が極まった時、再び春を回復させることになるのである。

〈五〉。それは〈一＋四〉であり、頭と四肢のごとく対称的全体とその統括者を表現する。中国においては四方位と中央、西欧においては同じく四方位と天、のような空間の分割がその例である。一年の分割ではわが国の歳時記、四季に特別な年の初めである新年を加えた構成などに、あるいはその痕跡があるのかもしれない。しかし一年周期を分割する数はすでに確定しているもう一つの数、月の盈虧に基づく〈十二〉の約数でなければならず、この点で〈五〉はその資格を欠いている。

〈六〉。〈三＋三〉。正三角形が表わす高次の統合への志向と逆三角形が表わす原初への還帰の和、夏を頂点とする三分割と冬を頂点とする三分割。それはありえなくはなさそうであるが、一年を大局的に概括するには六十度の分割はせわしなく、しかし二十四節季七十二候のようにその微分的変化を追うには大ざっぱすぎる中途半端な数であり、それ故にあまり用いられなかったのであろう。

やはり一年周期を分割するのは、推移相において季節を把握し、一方向的な完成態への前向指向、先駆的終結を包有する〈三〉か、静止相においてそれを把握し、対称対比的な、差異を強調しつつもその反復を潜在させた〈四〉の何れかが妥当であろう。

この両者はあるいは、ヘブライズムにおける線分的な時間と、ヘレニズムにおける円環的な時間、という二つの時間的把握にいく分類似した区分であるのかもしれない。

ところで吉川[5]は漢時の挽歌（薤露歌）の解説で言う。

世界のすべては時間の流れの上を推移してゆくという感覚は、早くから中国人にあった。――「薤上露、何んぞ晞き易き」。――時間の推移の上にのって、露はきえ去り、人間はその終末に到達する。

しかし、人間の上に見られる推移、それは自然の推移と、重要なところでおなじでない。自然は推移しつつ循環する。「露は晞けど明朝更に復た落ちん。」しかし人間の生命は、再び循環することはない。「人死一去何時帰。」

人間も自然も同じ法則のもとにいるというのは、中国人の世界観の根本であった。しかしそれは人間と自然の間にある大きなさけめ、すなわち人間の一生は有限であるのに反し、自然は悠久であるという大きなさけめに、目をつむったものであった。このさけめが、ふと目の前に現れたときに、中国の悲傷の詩は生まれる――（以下略）。

この推移と循環の二面性は一年周期の三分割と四分割とに対応するものであろう。

この両者は時に相互に滲透することもある。たとえば四分割された四季に孟仲季というサブカテゴリーが設定されることがあり、それは四分割内における三分割性の反映と考えられる。他方、三分割ではその中央部のプラトーが二分されて四分割に近づくことがある。太陽の三様態に

おける南中は長すぎる過程が午前と午後に分けられ、人間の一生における成熟は青年期と壮年期に分けられ、植物の成長における結実はその前に開花がおかれることがあろう。王朝の盛期というプラトーはたとえば初唐と晩唐の中間を盛唐と中唐のように区切ることが可能である。さらに、三分割性と四分割性とはより複雑な形で重合することもありうるであろう。

四、春

欧陽修の詞は春と秋を背景とした作品が多く、夏冬を背景とした作品は極めて少ない。各月ごとの風光を詠じた「漁家傲」を除くと夏冬の詞は「臨江仙（柳外輕雷池上雨」（夏）、「蝶戀花（簾幕東風寒料峭」（冬）など数首にすぎない。春秋は夏冬に比して風趣に富んでいるということなのであろうが、さらに春の詞は秋の詞に比して約三倍になっている。彼の詩作品にはこうした極端な偏位は認められない。

前述のように郭正忠は欧陽修の抒情詞を傷春、嘆老、惜別に分けたとのことであるが、惜別とはどのような内容を指しているのであろうか。惜別を字義通りにとればそれをテーマとした作品はあまり多くないので、われわれはかわりに三十首に近い春を背景とした閨怨詞をあげたいと考える。無論、秋を背景とした閨怨詞も存在するが、なぜかそれは春のそれに比してはるかに少ない。

まず春の閨怨詞について考察してみたい。ごく定型的な例。

蝶戀花

畫閣歸來春又晚
燕子雙飛
柳軟桃花淺
細雨滿天風滿院
愁眉斂盡無人見
獨倚闌干心緒亂
芳草芊綿
尚憶江南岸
風月無情人暗換
舊遊如夢空腸斷

玉樓春

去時梅蕚初凝粉
不覺小桃風力損
梨花最晚又凋零
何事歸期無定準
闌干倚遍重來凭
淚粉偸將紅袖印
蜘蛛喜鵲誤人多
似此無憑安足信

後闋第三行は西京雑記にある、鵲がさわげば待ち人が来て、蜘蛛が集ま

れば喜びごとが多いという、陸賈が樊噲に語ったとされる言葉をふまえている。

春の閨怨詞がより多い一つの理由としてわれわれは次のように仮定してみたい。酒席において経綸を論じるよりも豔曲をうたう方がふさわしいことは言うまでもない。それは多く女性を主人公とした閨怨という形をとったのであろう。そして当時の男尊的社会通念からして女性は若さが最も価値あるとされており、その若さが空しく失われる過程が、美しい風光とそれが速やかに去りゆく春の過程に比定されたのではないであろうか。男性にはさらに生が充実する壮年期と、ある視点からみれば独自の価値をもつ老年期もあるからである。

次に嘆老詞を例示したい。

玉樓春

兩翁相遇逢佳節
正値柳綿飛如雪
使須豪飲敵青春
莫對新花羞白髮

人生聚散如弦筈
老去風情尤惜別
大家金盞倒垂蓮
一任西樓低曉月

弦筈は弦とやはずのことで、ひとたび離れれば逢うことは難しいという陸機の表現に由来している。後闋第三行は、君よ金蓮を形どった杯をさかしまにしようということで、互いに乾杯するという意味であろう。柳絮が雪のように飛ぶ美しい春にちょうど旧友に逢い、失われた青春に対抗しうるほどに豪飲しようという。青春とは春のことか年少者のことか、それとも若さや青年期ということなのか、いずれにしても老人には失われたものなのであろう。

聖無憂

世路風波險
十年一別須臾
人生聚散長如此
相見且歡娛

好酒能消光景
春風不染髭鬚
爲公一醉花前倒
紅袖莫來扶

欧陽修は慶暦五年（一〇四五年）から至和元年（一〇五五年）まで滁州に貶謫されていた。後闋第二行は、この暖かい春風も白くなったひげをもとの黒に染めてはくれないということであろう。

嘆老詞も春を背景とする作品が多い。秋のそれもないわけではないが極めて少ない。「減字木蘭花（傷懐離抱　天若有情天亦老――李賀の句をそのまま使用している――）」、「漁家傲（九日歡遊何處好・・・落葉

西園風嫋嫋　催秋老）などがそれにあたろうか。

老いと秋は同期化していて対比の効果が少なく、やはり嘆老には若さとその象徴である春をとりあげることが多いのであろう。花や柳絮は開花を長く待たれながら咲けば忽ちに散り、春は長く待たれながら来たれば忽ちに去り、生は自己実現が期待されながら気づくとすでに終極に近づいている。三者は同型的であり、互いの隠喩である。他方、彼の嘆老詞はほとんどが杯を挙げて愁思に対抗しようではないか、という定型的な帰結をとる。そこに痛切な悲傷や悔恨はないように思われる。われわれはここでも閨怨詞におけると同じく、エリクソンの発達段階説、自己実現と絶望の段階などを仮定したくなる。当時の士人にとって壮老年期が自己実現の達成される人生の盛時である。春の嘆老はこの時期を省略し、若年とすでに退隠した老年を直接対比させる。失われたのは若さであり、生の意味全体ではない。彼の官僚生活は一定の成功をおさめたが、そのことが嘆老詞におけるいく分の真正性の欠如と関連しているのではないであろうか。

最後に傷春詞について考えてみたい。欧陽修は、あるいは多くの詞人たちは、春であるが故に心を傷ましめるのか、春であるにもかかわらず心を傷ましめるのか。われわれはここで以前から病跡学でとりあげられてきた trotz か wegen かの問題に出会うことになろう。

典型的な trotz（にもかかわらず）の例は、春風駘蕩として百花咲き出ずる美しい春の風光と、それと反対の愁いにみちた自らの心情とを対比させた作品である。

漁家傲

二月春期看已半
江邊春色青猶短
天氣養花紅日暖
深深院
眞珠簾額初飛燕

漸覺銜盃心緒懶
酒浸花臉嬌波慢
一捻閒愁無處遣
牽不斷
游絲百尺隨風遠

養花の天気とは牡丹の開くころに多い軽雨微雲の天候を指す。詞は春が深まると漸く心が懶くなることを覚え、一段と増した閒愁を処理するすべもない心情を詠う。外には美しい春の風光があり、しかしにもかかわらず愁思は一層深まるのである。後闋第二行、慢は曼であり、酒に酔って色づいた女性のまなざしがさらに美しくなるという。この詞は女性を侍らせた酒席の作なのか、女性に仮托して春を詠っているのか、いずれにしても美しい春と、にもかかわらず晴れやらぬ心情との乖離がテーマであることに変わりはないであろう。

鵲踏枝

誰道閑情抛棄久
毎到春來

惆悵還依舊
日日花前常病酒
不辭鏡裏朱顏瘦

河畔青蕪堤上柳
爲問新愁
何事年年有
獨立小橋風滿袖
平林新月人歸後

この詞はわれわれが披見しえた限りでは二種の欧陽集全集[10][12]と前掲「欧陽集秦觀詞選」では欧陽修の作とされているが、「欧陽修詞箋注」ではとられていない。近年の「馮延巳研究」[6]「馮延巳詞」[8]には当然のことながら採録されているが、他の二作品（「六曲闌干偎碧樹」「庭院深深深幾許」）とともに欧陽修作の説があることも併記されている。われわれはどちらかといえば馮延巳の作ではないかという印象をもっている。欧陽修の作は傷春であるにせよ閨怨嘆老であるにせよかなり定型的であり、かついく分直截な表現がなされており、この詞のようにサンボリズム風に空虚感を景に托して詠じる傾向はより少ない。ただし田中は後闋二、三行「爲問新愁　何事年年有」は孫光憲「生査子」の「春病與春愁　何事年年有」に影響されているのではないかと指摘しているが、するとにわかに欧陽修説が有力になってくるように思われるが、いずれにせよこの三名作の作者が確定できないのは残念なことである。しかしこの問題はしばらく措いて、とりあえず trotz の例としてこの詞をとりあげてみたい。小川環樹は村上[3]の「李煜」の跋でこの作品に触れて言う。

（この詞の）後半において、まず「河畔の青蕪　堤上の柳」の句で、春景色が点出される。しかし、それはただの景物ではなく、また人の心を浮き立たせるはずなのに、実はそうでないことが次の二行で明らかになる。「爲に問う新たなる愁いの　何事ぞ年年に有る。」青青としげる草、芽をふく柳。わが心のうちに生い出て、はびこってゆく憂愁は、その草や柳のように、年年に新しい。つまり後半の第一行は、読者の予想と反対の事を言い出すために置かれているもので、二重の役目をはたすわけになる。

（中略）

前半で提起された「閑情」と「惆悵」。前者は春の楽しさを味わう心の余裕をさし、後者は何のものをもってもうずめることのできない心の空虚をさす。その空しい心に入りこんで来るのは、いつも愁い、と言うのが後半である（以下略）。

ここには trotz という契機の意味と効果が適確に述べられている。さきには明示しなかったが、既述の閨怨嘆老詞も極めて多くをこの契機に負っていると言えるであろう。

春であるが故に（wegen）心を傷ましめるとはどのような事態であろうか。

浣溪沙

湖上朱橋響畫輪

溶溶春水浸春雲
碧瑠璃滑浄無塵

當路遊絲縈醉客
隔花啼鳥喚行人
日斜歸去奈何春

この詞に対して楊愼は「『奈何春』三字、新而遠」と言い、沈際飛は「奈何二字　春色撩人」と言い、潘游龍は「奈何字　春色無邊」と言う。「撩人」とは人の心をみだすの意か、人にまつわりつくの意か。どちらの意味にしても、そして他の二者の評語も、春がくみつくしえざる広さと深さをもち、作者が十分にそれに対処しきれず、そのことを嘆じている、と指摘しているように思われる。もっとも兪陛雲はこの詞は、上闋では春光明媚な風景を描いているが、下闋では醉っぱらいや鳥がやまかしく騒ぎたててどうしようもなく、夕方にもなったので帰るだけであると述べている、と評する。うがった興味深い見方であるが、しかしそうしたことを詞として詠おうとするものであろうか。やはりこの「奈何」は大いなるものに対する畏敬、そして自らの無力感の表白であるように思われる。

玉樓春

東風本是開花信
及至花時風更緊
吹開吹謝苦忽忽
春意到頭無處問

把酒臨風千萬恨
欲掃殘紅猶未忍
夜來風雨轉離披
滿眼淒涼愁不盡

花信とは小寒から穀雨に至る百二十日間、五日を一候とし、一候ごとに一つの花を春風が開かせるという、そうした花だよりを言う。離披は落花が散っているありさまである。「春意」とは何か。春ののどかな気持か、春を楽しもうとする気持か、あるいは春への何らかの問いかけの気持か。花の開落があわただしく結局のところ問いをいつどこに向けてよいかわからない、という表現からして、それは春を楽しむ気持であるにせよそれと一体化した春という存在への問いかけ、さらに一歩を進めて、そもそも春とは何であるのか、その意図はどこにあるのか、われわれはどうすればそれに対応できるのか、という問いかけであるように思われる。それを理解するいとまもなく春は過ぎ去り、詞人は空しく残紅に対するのみなのであろう。彼はまた「春到幾人能爛賞」（「定風波」）と詠い、「借問春歸何處所」（「玉樓春」）と詠う。爛賞とは爛漫たる花または春の盛時に対峙し、それを味賞しつくし、その意味を了解することではないのか。それがわれわれの多くには困難であるという。春帰というのであるから、それはどこからか来たり、しばしとどまり、しかしその本意を明らめるいとまも与えずいずこかへと去ってゆくものと考えられているのであろう。

鶴沖天

梅謝粉
柳拖金
香滿舊園林
養花天氣半晴陰
花好却愁深

花無數
愁無數
花好却愁春去
戴花持酒祝東風
千萬莫忽忽

花が好ければかえって愁いは深いという。かえってと言っているにもかかわらずわれわれはこの詞にtrotzよりもwegenの契機をみる。それはさきにtrotzの例としてあげた作品では明るい春光がひとまずは肯定され、それに対比して愁苦の情が表現されていたのであるが、この作品では花、あるいはそれを析出した春そのものに衰残凋落のみが看取されているからである。無論、後闋では愁いは花の咲く春が去ってしまうからであると詠われている。しかし花を喜ばずに愁うるだけということは結局はそれに正対し、それを十全に経験味賞しつくして、それが問いかけるものに応答しえないからではないか。そこでは終末論的色彩を帯びたカイロスの予兆のみが突出しているのではないであろうか。

こうした詞句から、われわれは春であるが故に心を傷ましめるという事態があるのではないかと考える。春、この無辺で深微で決して尽くしえざるなにものか、彼はそれに正面から対峙し、その全質量を受けとめ、それを十全に味賞し、その意味するところを了解し、遂にはその中に入りそれと一体になろうと試みるに至る。しかしそれは処処に溢れながら捉えようとすればどこにもなく、にもかかわらず対処するにはあまりにも巨大であり、その試みはことごとく失敗に帰し、それは尽くしえざる深みをもった謎のままに過ぎ去ってゆく。ここには一種のヌミノーゼ（Numinose）に対する感覚に近いそれがあるように思われる。周知のごとくヌミノーゼとはオットー・Rが神の観念を表現する「聖なるもの」を分析し、そこに合理的倫理的な要素だけではなく非合理的なそれも存在することを見出し、神性を意味するラテン語「ヌーメン」に基いて作り出した言葉である。それは表現しがたい神秘的な神性で、抗しがたい魅力をもちながら、他方で深い畏怖、強い圧倒感をともなう被造性の感覚を人間に与えるものであるとされる。西欧人が神の前で抱いたほどの強烈な被造感が欧陽修にあったとまでは考えられないが、しかし彼が――そして多くの詩人たちが――春という広大無辺な存在、あるいはそうした世界のあり方そのものに対し、限りない魅力とそれを十全に把握し味賞しえない焦燥、それを失うことへの悲哀を感じたということはありうるのではないであろうか。われわれはそこにwegenという契機の存在を指摘できるものと考える。

wegenとtrotzとは必ずしも同一作品の中に共在しえないわけではない。たとえば閨怨詞においてtrotzの契機が強調されていても背景にwegenのそれが潜在していると考えられる作品も多く、傷春詞においてwegenの契機がテーマであるにしても部分的にtrotzのそれが表面にうち出されている作品も存在する。両者は相反的でもあるが相補的でもありうるであろう。しかしわれわれは極限的な理念としては、この対比的

な二者があるものと考える。

この両者はさらに、第三節で述べた三分割的季節観と四分割的なそれとにある程度対応しているように思われる。wegen、三分割性における不可逆的で一切の猶予なく終末へと向かう一方向性、その線上の春、花々は、風光は圧倒的に美しく、しかし分析風の表現を藉りれば Ich-fremd な、親しみや安らぎを与えない何ものかである。われわれはそれに十全に関わり、それと一体になることもそれを止めることもできない無力感をもち、痛烈な有限性の自覚、被造感をもつ。これに対して四分割性における春は畏怖感を与えず、その風光は Ich-gerecht な、親しみを与えるものであり、われわれは自らの心情がそれにそぐわない場合であれ(trotz)、そうしたことどもがおこる地平としての春に信頼し、過ぎ去っても再びめぐりくるであろう循環性に期待し、不可逆的な決定性というよりも可逆的な暫定性のうちに安らぐ。そこでは被造性よりも親和性が優越し、詠嘆はしばしば感傷的な、それ故に半ば快よい情趣を伴うに至る。

欧陽修からはなれるが、たとえば唐詩における表現、

舊苑荒臺楊柳新
菱歌清唱不勝春
（李白「蘇臺覧古」）

煬帝行宮汴水濱
數株楊柳不勝春
（劉禹錫「楊柳枝詞」）

この「春にたえず」という表現は、春の圧倒的な重量を受けとめえないこうした被造感を示唆しているのではないか。

江南逢李龜年

岐王宅裏尋常見
崔九堂前幾度聞
正是江南好風景
落花時節又逢君

どこまでも美しい春、その美しい外界と悲哀愁苦にみちた内面との乖離、この詩は典型的な trotz の例であろう。しかし彼がその愁苦の情を言わず、さりげなく正にこれ好風景と言い、さらには落花の時節と言い、また君に逢うと言う時、その抑制された逆説性には春の循環性ではなくその循環性をも部分として含有するより基底的な一方向性の意識が、またそれと共起的な大いなる春における wegen の、被造性の意識が看取されるであろう。この杜甫の七絶は trotz と wegen が重合した名作であるように思われる。以上、両契機を例示するためにいささか本論をはなれてみた。

五. 秋

秋は美しい季節である。

漁家傲

一派潺潺流碧漲
新亭四面山相向
翠竹嶺頭明月上
迷俯仰
月輪正在泉中漾

更待高秋天氣爽
菊花香裏開新釀
酒美賓嘉眞勝賞
紅粉唱
山深分外歌聲響

春もよいが秋の方がさらによい、という作もある。

漁家傲

青女霜前催得綻
金鈿亂散枝頭遍
落帽臺高開雅宴
芳尊滿
採花吹在流霞面
桃李三春雖可羨
鶯來蝶去芳心亂
争似仙潭秋水岸
香不斷
年年自作茱萸伴

青女は霜雪を司る神で霜のおりるころに菊花が開くという。金鈿はこの詞では小さくて花の密な菊を意味しているとされる。落帽とは、桓温の参軍であった孟嘉が重陽の日に山に遊んだ折、風で帽子がとばされたのに気づかず、桓温が孫盛にそれを笑う文を作らせた、という故事に基づくとのことであるが、要するに九月九日に宴を開いたということなのであろう。流霞は抱朴子にみえる仙酒の名、仙潭は河南府にある菊潭、かたわらに甘菊が生えていてそのために川の水も甘く、それを飲むと長生きするといわれている。茱萸は重陽節に邪気を払うために用いられる。些末な故事が多く用いられているが、要するに春もいいがいろいろとせわしなく心を惑わすことが多く、どうして心静かに菊花や秋水に対する秋に比肩しえようか、と秋を賞めているのであろう。

春ほど多くはないが、無論、秋の閨怨詞も存在する。

清商怨

關河愁思望處滿
漸素秋向晩
雁過南雲
行人回淚眼

雙鸞衾裯悔展
夜又永
枕孤人遠
夢未成歸
梅花聞塞管

後闋第一行は、一対の鸞をぬいとりした夜具を敷くことも悲しいといったことであろう。

玉樓春

別後不知君遠近
觸目淒涼多少悶
漸行漸遠漸無書
水闊魚沈何處問

夜深風竹敲秋韻
萬葉千聲皆是恨
故欹單枕夢中尋
夢又不成燈又燼

上闋第三行は「離愁漸遠漸無窮（踏莎行）」句を想起させる表現である。

第四行、魚は雁とならんで書信を伝える動物とされてきた。

秋はもともと自然自体が寂しげであるので春ほどに trotz の契機は顕著ではないが、基本的にこれらは春の閨怨詞とあまり変わりはないようである。

秋、凋零搖落の季節、三分割においてであれ四分割においてであれ生が、世界が終末へと崩落してゆく時、古くから当然のことながら悲傷を詠じる詩が作られてきた。

悲哉秋之爲氣也
蕭瑟兮草木搖落而變衰
――――――
泬寥兮天高而氣清
寂寥兮收潦而水清
（宋玉「九辯」）

帝子降兮北渚
目眇眇兮愁予
嫋嫋兮秋風
洞庭波兮木葉下
（屈原「湘夫人」）

秋風起兮白雲飛
草木黃落兮雁南歸
――――――
歡樂極兮哀情多
少壯幾時兮奈老何

（漢武帝「秋風辭」）

それ故に彼の詞にも悲秋の作品が多い。

漁家傲

九日歡遊何處好
黄花萬蕊雕闌繞
通體清香無俗調
天氣好
烟滋露結功多少

日脚清寒高下照
寶釘密綴圓斜小
落葉西園風嫋嫋
催秋老
叢邊莫厭金尊倒

前闋第五行は菊花が霧や露を受けてよく開花しているということか。後闋第二行は菊の花びらが円形に密集して斜めに咲いているありさまであるように思われる。

又

八月秋高風歴亂
衰蘭敗芷紅蓮岸
皓月十分光正滿
清光畔
年年常願瓊筵看

社近愁看歸去燕
江天空闊雲容漫
宋玉當時情不淺
成幽怨
鄉關千里危腸斷

蘭と芷は香草であり、看はもてなしの意と考えられる。社近は秋の社日、すなわち立秋後の最初の戊の日に近いということで、毎年このころに燕が飛び去ると伝えられている。

春から夏を経て秋に至る経過を主題にした作品もある。

玉樓春

蝶飛芳草花飛路
把酒已嗟春色暮
當時枝上落殘花
今日水流何處去

樓前獨繞鳴蟬樹
憶把芳條吹暖絮

紅蓮綠芰亦芳菲
不奈金風兼玉露

後闋第三、四行は蓮や菱も美しい花ではあるが、しかしすでに厳しい晩秋の気候がせまっているということであろうか。とどめようのない時の流れを嘆じているように思われる。

われわれはここでしばらく詞から眼を転じていくつかの彼の詩作品をとりあげてみたい。詩においても秋の悲しみを詠った作品は多い。

蟲鳴

葉落秋水冷
衆鳥聲已停
陰氣入牆壁
百蟲皆夜鳴
蟲鳴催歲寒
唧唧機杼聲
時節忽已換
壯心空自驚
平明起照鏡
但畏白髮生

秋懷

節物豈不好
秋懷何黯然
西風酒旗市
細雨菊花天
感事悲雙鬢
包羞食萬錢
鹿車終自驚
歸去潁東田

第六句は俸禄にみあった仕事ができないことを恥じるという意味であろう。鹿車は小型の車であり、また彼は潁州に田を買って帰隠の心をもっていたという。

彼は当然のことながらこのように秋の悲しみを詠う詩を作っている。しかし他方でそれとは反対の秋の詩をも作っている。

送子野

四時慘舒不可調
冬夏寒暑易鬱陶
春陽著物大軟媚
獨有秋節最勁豪
金方堅剛屏炎瘴
兌氣高爽清風飆
烟霞破散灝氣豁

山河震發地脈搖

（以下略）

易では兌は金であり、金は季節では秋、方角では西を表わす。五、六句は秋が来て暑熱が斥けられ、気候が爽やかになったということであろう。以下、秋には自然も壮大になり人間の精神も奮い立つこと、時局への慷慨、張先（字は子野）への賛辞、高い官職への転任ではないことへの慰めなどが続く。送別の詩という前提はあるものの、凛然とした秋の本質が詠われている。

次の詩も同様である。

新霜（二首の一）

荒城草樹多陰暗
日夕霜雲意濃淡
長淮漸落見洲渚
野潦初清収瀲灩
蘭枯蕙死誰復弔
殘菊籬根爭豔豔
青松守節見臨危
正色凛凛不可犯
芭蕉芰荷不足數
狼藉徒能汚池檻
時行収斂歳將窮
冰雪嚴凝從此漸
咿呦兒女感時節
愛惜朱顔屢窺鑒
惟有壯士獨悲歌
拂拭塵埃磨古劍

第三、四句、秋になって淮河の水位がさがって中洲がみえること、また前述「九辯」の一節を引く。第五句からの六行は深まる秋の花木にかこつけて知友蘇舜欽が前年に不遇のうちに世を去ったことを寓している、と陳新は注している。末尾四句、児女は秋が深まり年が逝くことに感じて、老いを悲しみ鏡を見たりするが、壮士はますます意気さかんであると詠ずる。この詩は慶暦七年、彼が滁州に貶謫されている時の作であり、秋こそ壮気が激発する時であると言っているが、そう表現しなければならないほどに失意も大きかったのであろう。しかし秋自体にそうした厳しさがなければ、このような表現も可能ではなかったことであろう。

秋には澄爽清麗な美しさがある。他方でそれは深まるにつれて凛冽悲愴の様相を帯びてくる。こうした下降的意味方向において逆説的に人間が生気づけられる現象については、異常心理学がさまざまな視点から言及している。曰く、反動形成（フロイト・S）、躁的防衛（クライン・M）、生物学的逆説（ワイツゼッカー・V・v、やせ症などにおいて身体的衰弱に反比例して精神が高揚する現象）、通夜軽躁（ブランケンブルク・W）、イントラ・フェストゥム（木村敏）などなど。「通夜軽躁」(Leichenschmaushypomanie)[14]とは葬儀時の会食において近親者が不自然な気分の高揚や行動過剰を示す事態である。ブランケンブルクはそこに負荷からの解放や、より根底にある死の祝祭性という契機を見ており、木村[1]はさらにそこから、個別的生命の日常性が甘受せざるをえない有

限性からの徹底的な離脱である、イントラ・フェストゥムという祝祭の時間性をとり出している。「獨有秋節最勁豪」「壯懷直恐衝斗杓」（「送子野」）とか壯士が荊軻に倣って古剣を磨くといった表現はこうした心理に近いものであろう。これは前節で述べた trotz という現象に比定しうるものであろうか。この場合には、秋という下降的な季節であるにもかかわらず気分が高揚する、という逆の意味になるであろうか。trotz の契機があるとは思うが、春のケースに比してやや心理的、あるいは人為的な側面が強いようである。いずれにしても詞人としての彼には認められない下降への抵抗が、詩人あるいは士人としての彼には存在しているといえよう。

wegen という現象はどうであろうか。彼に詩詞ではないが「秋聲賦」という作品がある。ある夜彼が読書をしていると、西南の方角から波濤の如く風雨の如く戦地に赴く軍隊の行進の如き激しい音がする。そこで童子を呼んで表で見てくるように言うと、童子が帰ってきて報告する。「星月皎潔　明河在天　四無人聲　聲在樹間」。そこで彼は言う。これこそ秋声、どうして来てしまったのか。秋のありさまというのは「其色慘淡　煙霏雲斂　其容清明　天高日晶　其氣慄冽　砭人肌骨　其意蕭條　山川寂寥　故其爲聲也」と秋の美しさと厳しさが語られる。以下、諸象に五行説に基くような解説を加え、万物が凋落するのは自然の摂理であり、秋声を恨む必要はないことを童子に説く。しかし童子は居眠りをしていて、ただ虫の声だけが自分の歎息を助けてくれるようであった、と述べて終る。童子の、声は樹間にのみあった、という表現は、秋という季節が声として、あるいは風、気として、至るところにありながらどこにもない、という逆説的なあり方をしていることを示唆していて興味深い。ここで欧陽修は秋に正対し、その問いかけに応答し、その意味を解明しようとしているかにみえる。これは wegen の契機に近いように思われる。

しかしいずれにしてもこれらは詩や賦であり、詞ではない。くり返しになるが詞には詩におけるような深秋の逆説性、賦におけるような正対性はなく、それが士人の公的な表出である詩賦と、もともとは娯賓消遣の歌曲であった詞との相違をあらわしているのであろう。

ここで聊か本題から離れるが、彼は自らの終末、絶対的な他者性、死をどのように捉えていたのか。ここにその一端をかいまみせるような詩がある。明道二年（一〇三三年）、最初の妻胥氏が乳児を残して病逝した時の詩「綠竹堂獨飲」がそれである。ここで彼は旅から戻ると夫人が亡くなっていたこと、夫人の思い出を詠い、自分は平生から剛気を貯えていたつもりであったが実は柔弱であったのか、と自問する。そして荘子は妻を亡くして鼓盆して歌ったというが本当は悲しかったのであろうと言い、「又聞浮屠説生死　滅没謂若夢幻泡　前有萬古後萬世　其中一世獨蛁蟟」と続ける。仏教では人生は夢幻の泡、永遠の中のなつぜみの如きものにすぎないと説いているのであるが・・・。そして、いずれにせよこの悲しみは「古來此事無可奈　不如飲此樽中醪」と結ぶ。

この詩は夫人を失った悲しみを詠ったものであるが、彼は自らの生も無から来たり、ひとときこの世にとどまり、また無へと去ってゆく夢幻の泡と考えていたのか。苛酷な、不可逆的な、三分割性に基く一回性を見ていたのであろうか。もっともこの場合であっても、それを空しい徒労とする見方と、それ故にこそかけがえのない意味をもつとする見方とがあろうが。あるいは高らかに壮志を詠い、死後も青史に名を伝え竹帛に功を記される、といった四分割性に基く死と再生のテーマを夢想して

いたのであろうか。後者の可能性が大きいようにも思われるが、もとよりわれわれには正確に判断することはできない。絶筆は次の絶句と伝えられている。

冷雨漲焦陂
人去陂寂寞
惟有霜前花
鮮鮮對高閣

焦陂は潁州にある退隠の地である。この詩から何を読みとることができるであろうか。

六．結語

この小論では欧陽修の詞について考察した。まず彼の詞は春と秋を背景にした作品がほとんどであることから、それらを春の詞と秋の詞とに分け、それぞれの特徴をとり出そうと試みた。それに先立って黄道分割の諸可能性を簡単に考察し、一年周期の分け方には三分割と四分割の二種があり、それぞれの分割様式に応じて季節の意味、とりわけ本論では春秋の意味が異ることを指摘した。春の詞では写景詞を別とすれば、閨怨、嘆老、傷春が三大テーマであり、それらの詞における傷心は「春であるが故に(wegen)」と「春であるにもかかわらず(trotz)」に分けられ、それぞれは三分割性の季節観と四分割性のそれとに対応することを指摘した。秋の詞ではやはり写景、閨怨、悲秋が主なテーマであるがtrotzやwegenの契機はあまり顕著ではなかった。かわりに若干の秋の詩賦をとり上げたが、そこにはこうした契機が認められることを指摘した。

欧陽修の詞集には馮延巳や晏殊その他、五代から北宋初期の諸詞人の作品が混入されている可能性があり、多くの名作が必ずしも彼の作品と確定されえないのは残念なことである。その中で最高傑作「少年游（闌干十二獨凭春）」が彼の作品であると確定できるのはまことに喜ばしいことであろう。

文献リスト

(1) 木村敏　「時間と自己」　中央公論社　一九八二年
(2) 田中謙一　「歐陽脩の詞について」（田中謙二著作集第二巻所収）　汲古書院　二〇〇〇年
(3) 塚本瑞代　「季節の美学」　新曜社　二〇〇六年
(4) 村上哲見　「李煜」　岩波書店　一九五九年
(5) 吉川幸次郎　「人間詩話」（吉川幸次郎全集第一巻所収）　筑摩書房　一九七三年
(6) 張自文　「馮延巳研究」　京貨出版社　北京　一九九九年
(7) 陳新、杜維沫選注　「欧陽修選集」　上海古籍出版社　上海　一九八六年
(8) 黄逖德編　「馮延巳詞」　中国書店　北京　二〇〇六年
(9) 黄余箋注　「歐陽修詞箋注」　中華書局　北京　一九八六年
(10) 歐陽修　「歐陽修全集」（上下）　廣智書局　香港（出版年記載なし）
(11) 薛砺若　「宋詞通論」　上海書店　上海　一九八五年

(12) 王鈞明「歐陽修秦觀詞選」（中國歷代詩人選集二二巻）遠流出版 台北 一九八八年
(13) 楊家駱編「歐陽集全集」（上下） 世界書局 台北 一九六九年
(14) Blankenburg, W.: Lebensgeschichtliche Faktoren bei manischen Psychosen. Nervenarzt. 35 : 536, 1964